

最近のOAブームにはすさまじいものがある。ビジネスショーの人気コーナーは、デパートの特売場なみの混雑でパンフレットをもらうのもやっとなというありさまである。新聞・雑誌・テレビもOAの話題でにぎやかで、週刊誌も興味本位にとりあげている。また、機器メーカーのまじめな記事広告も目だってきた。最近、和文ワードプロセッサで作った「ワードプロセッサの活用法」という本も現われてきた。原稿づくりから本になるまで、期間もコストも従来の5分の1になったという。その生産性向上は特筆に値しよう。さて、思いつくままにOA感をのべてみたい。

第1は生産工場のオートメーションと事務のオートメーションの違いをよく認識することである。生産工場の自動化・省力化はエレクトロニクスの発達に支えられ、すばらしい成果をあげ日本経済の原動力になっており、これがOAブームの1つの背景になっていることはご存じのとおりである。NC工作機械にしる産業用ロボットにしる、それが役立つためには、その生産工程が安定していることが第1である。不安定な工程で、ときには不良品を作るのであっては、あつという間にお釈迦の山を作ってしまう。また、いつ環境が変化し工程に不都合を生じて、それに対応して工程を改善できる能力をもった職場でなければならない。このように生産工程の改善があってオートメーションは効果をあげたのである。

これにくらべて、事務部門では生産部門ほど条件が整備されているとはいえない。オフィスは人間が中心の場であり、そこで生産されるアウトプットは情報というもので、その価値は目に見えにくい。そこで、事務改善にいろいろとりくむことになるが、まず事務の役割は何か、その品質はどう表わすのがよいか、これを明確にすることから始まる。それは決して生やさしいことではない。このためには、生産工場で成果をあげ、海外からも注目されている日本の品質管理が事務の分野でも期待され、これが有力な手がかりを与えよう。最近、事務部門の品質管理も成果をあげ始めており、そういう職場でないとOAも効果をあげられないのではなからうか。

第2はオフィスの中心は人間であり、OAも人間中心でなければならない。その姿は分散型で、いわば地方の

時代である。従来のコンピュータ利用が集中処理型であったのに対してOAは分散処理型であるとはよく言われるが、それも単に階層的ネットワークでインテリジェント端末機がつながっていることでない。もちろん、ネットワークにより、必要なときに必要な所につながるが、あくまでもローカルで処理することがベースである。大体端末機という言葉がよくない。端とか末とか中央から眺めた言葉であり、最近ワークステーションと言いはじめた。要するに、ローカルな仕事は、そこで局所的にまかされてすすめられ、他と関連のある仕事も他とのインターフェイスを明確にし、それを守る限りは仕事のやり方はまかされる。そういう分権と参加を基本とした地方の時代であってはじめて、OAはそこで働く人間の手となり足となって成果をあげるのではなからうか。

第3に現在のOA機器はその機能にこそ注目しても、機器そのものは仮りの姿であって、いずれこれら単機能を複合化した本来のOA機器が出てこよう。現在、マイコン・ワードプロセッサ・ファクシミリがOAの三種の神器といわれているが、あれよあれよと機能アップされ、新しい機器が続々と売り出されている。これらの単機能機器でOAをすすめると、オフィスは機器だらけで人の場所もなくなってしまふ。今後はこれらの機能が複合化され、ワークステーションとして使うことになる。何でも1つにまとめたのではまた扱いにくく、おそらく個人用の簡素なもの、共用の高度の機能をもったものになるだろう。したがって、現在はOA機器そのものでなく、その機能を味わう立場で試行する時期ではなからうか。そして、試行期間と平行してOA導入の体制をととのえることが、OA成功のポイントであろう。

さて第4、第5と続けたいところだが、誌面も終りに近づいてきた。OA時代にOR屋は何をなして貢献すべきだろうか。OAをすすめるうえでOR屋に期待されるものは分散・集中の問題をはじめいくらかでも豊富にあると思う。次の春季研究発表会の特別テーマは「オフィスオートメーションとOR」に決まったときく。OR屋はOAを自分の問題としてとりくもうではないか。これをオラーの問題という。「OR&OA→ORA→オラー→おれら」という語呂合せのお粗末でした。(大悪)